

琵琶湖定点定期観測

大山明彦・孝橋賢一・森田 尚・菅原和宏・金辻宏明・鈴木隆夫・太田滋規・岡本晴夫

1. 目的

琵琶湖の漁場環境の動向を把握するため、大正4年(1915年)から水象と水質の定期観測を実施している。

2. 方法

令和4年(2022年)4月から同5年(2023年)3月までの毎月1回、彦根港と安曇川河口の舟木崎を結んだ直線上に設けた5定点(Stn. I~V、図1)で、水温、透明度、プランクトン沈殿量、溶存酸素(DO)濃度、栄養塩濃度等の測定を行った(詳細については、資料編を参照)。

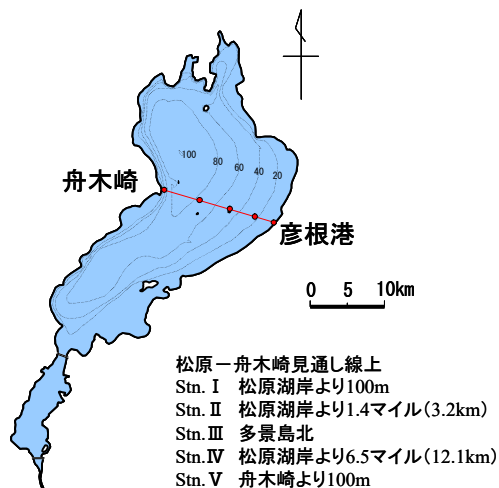


図1 調査地点

3. 結果

表層(0.5m水深)水温の5定点平均値は、5月と6月に平年値(1991年から2020年までの月別平均値。)を下回った以外は、おおむね平年値を0.2℃~2.5℃上回って推移した。特に4月には平年値を2.5℃上回る13.2℃、9月には2.0℃上回る27.5℃となったのをはじめ、その他の月も平年値を1℃以上上回ることが多かった(図2)。

底層(Stn. IV:水深約80m地点における湖底直上1m)におけるDO濃度は、4.2mg/L~10.3mg/Lの範囲にあり、貧酸素状態の指標値である2mg/L未滿となることはなかった。底層DO濃度は、おおむね近10年平均値(2013年度から2022年度までの月別平均値)前後の値で推移したが、6月には0.8mg/L上回る8.8mg/L、10月には1.9mg/L上回る5.9mg/L、1月には2.7mg/L下回る4.8mg/Lとなった(図3)。

なお全層循環は、琵琶湖環境科学研究センターにより2月13日に確認された。

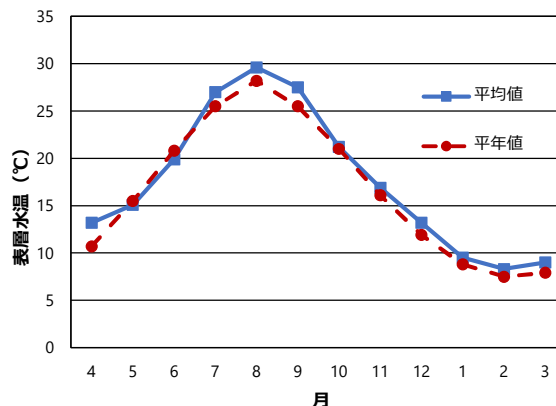


図2 表層水温(5定点平均値)の経月変化

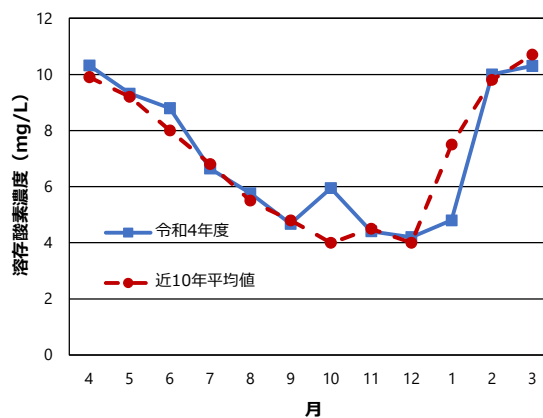


図3 Stn. IV底層(水深約80m地点の湖底直上1m)におけるDO濃度の経月変化